

プロ意識で大暴れ！

中家 伸之（NHK、総合科学部卒業生）

中学2年の英語の時間に、「I live in Tokyo.」を過去形にしなさい」と指されて、大まじめに「I live in 江戸。」とやったら、怒られた。以後10年、頭ごなしにドヤされることがなかった安定人生だったが、勤め始めて一変した。大小様々な失敗に容赦なく声が飛ぶ。こっちは「王貞治も最初は打てなかつた」と言い返すから、またドヤされる。

ある日のこと、前夜の「とんねるずの生カラ」を見たかと言われば、「見てません」と答えたら「なにいい！みてないだう！」ときたのは辟易した。要するに放送マンなら流行番組を常にモニターしておけというプロ意識の現れなのだ。そんな訳で、職業柄テレビ・ラジオ漬けの毎日である。

そんな職場にハイビジョンが入った。相撲やプロレスは大画面で迫力満点である。そのプロレスの興業形式のひとつに、東京での試合の模様を、地方の会場に設置した大画面で見せるというものがある。「そんなん家でテレビを見るのと一緒にないか」と思いきや、これが全然違う。画面からの迫力に加えて、大勢で集まっているものだから一人で部屋にいるのとは感激と印象の違いは歴然だそうだ。誰もが特別指定リングサイド席の視点で観戦できるという訳だ。新しい科学技術を工夫すれば予想もしない楽しみ方につながる例である。

科学技術が進み、世の中が豊かになれば、人々の欲求水準は高くなり、その関心は身の周りのことに向かう。マスメディアを例にとると、井戸端会議や瓦版の時代から、大新聞・全国ネットのテレビの時代への過渡期には、すべての人が全国的、世界的に共通な話題・情報を求めた。それが今ではハイテクの粋を集めた放送衛星を媒体に、地域情報や趣味・映画に特化した放送があり、津々浦々でのタウン紙の流行が頗著だ。これは決して過去の井戸端会議への回帰ではない。自分自身や生活環境が、日本や世界どうかかわっているかが現代の潜在的な関心事なのだ。Jリーグの成功の要因は、スピード感やスター選手の

存在に加え、ご当地意識を刺激したからだ。スポーツ観戦の様相の変化も決して「街頭テレビ」に戻るのではなく、観客自身が会場のナマのムードにどうかかわっているかを重視



「職場の仲間とのひととき」（左端=筆者）

するからにはかならない。21世紀の人間は情報に対して、より体験的、実践的になっていくだろう。

総合科学部が楽しいのは、そこで生活が実際に体験的、実践的で、つまり実に21世紀的だからだと思う。講義のほか、調査実習や実験が餘るほどあって、徹底的に鍛えられる。先生の研究姿勢を身近に感じ、じっくり勉強できる。学生にもセミ・プロ意識が根づいてくる。周りの仲間の専門が自分と異なるのも、大いに刺激的だ。それぞれがセミ・プロ意識をもつているものだから、学生生活に対する気迫がすごい。浴びるように飲むビール、大暴れの学祭など一見浪費に思えても、取り組む姿勢は厳しいから利息はちゃんと得ている。この多彩な日々が脳細胞、筋肉を刺激する。学術的刺激と乱暴大バカ的刺激の相乗効果が實に心地良かった。

このような感受性が21世紀には不可欠だと信じている。仲間たちは、戦う研究者、優しき公務員、炎のジャーナリスト、熱血教師、知性派エンジニアなどなど、卒業後それぞれ本当にプロになり、その付き合いはますます刺激的になっている。総合科学部で得た、プロ意識と刺激的な仲間は、人生の大きな財産だ。

新任教官紹介

浅井富雄 自然環境研究コース教授



1955年京都大学理学部卒業。しばらく大学院で気象学を学んだ後、気象庁気象研究所予報研究部で、当時予報の見込みがほとんどない豪雨・豪雪とその基礎としての積雲対流に関する研究を行った。

1964-66年に米国気象科学研究所客員研究員、1967年から京都大学理学部で気象力学、とりわけ雲や降水を伴う大気対流の力学を取り組んだ。1973年、東京大学海洋研究所に転じ、海洋気象研究部門を担当し、localからglobalにいたる広範な規模の諸現象に興味を持ち、それらを大気・海洋相互作用系の觀点から考察してきた。振り返ってみると、一貫して雲に関わる気象の研究に努力してきたが、依然として「雲をつかむような話し」が眼の前に山積している。最近数年間は学内外のadministrationに追いつられており、短期間ではあるが本学部で若々しい学生諸君と再び一緒に勉強できることを楽しんでいる。学生諸君が自然環境に知的興味を抱くことに少しでも役立てば幸いである。

浜渦哲雄 社会科学コース教授



3月31日にアジア経済研究所の退職辞令をもらい、退職挨拶もそこに午後の新幹線に乗って来広。翌日、戸田学部長より採用辞令を授与、頭の切り換えをはじめた。

3月末まで「サウジアラビアの石油政策」、「東南アジアにおける大型石油ターミナル建設の可能性」、「アジア産ガス国におけるガス利用」、「欧米諸国の中東産油田投資」などの資源エネルギー府受託調査に従事していた。政策立案に資するための報告書作りなので新しい視点を提示したり、新しいアイディアを出すことで勝負してきた。

一方、大学での授業の方は基本的なことを正確に教えることを要求されるので、頭の切り換えと適応が容易でない。目下は不適応症に悩み、教えることの難しさを痛感している。

石倉康次 社会科学コース助教授



この度、福祉社会学を主たる担当科目とする教官として赴任し、妻子共々5人で奈良から広島に移り住むことになりました。これまでの12年間は大阪を拠点とした民間研究機関で地域計画や社会保障・社会福祉に関わる調査研究に携わってきました。今回このような在野での私の研究を評価していただき、総合科学部という学際性を生かし得る環境で研究を継続できることを嬉しく思います。

担当の社会福祉の分野は近年ますます重要性を認識さ

れつつあります。しかし私は較べ国立大学ではこれまで積極的位置づけを与えられてはいませんでした。今後は、研究者養成や専門性を追究する姿勢を備えた福祉労働者の養成などの役割が求められることは十分予想されます。私のところでこれに応えるにはいま少し時間がかかりそうですが、学部内外の方々の協力を得ながら、学生諸君とともに前進して行きたいと思います。



品川哲彦 人間文化コース助教授



専門の授業科目では比較倫理学・生命倫理学を担当しています。もともとは現象学、とくに他者や生活世界の問題の研究に携わっており、いまでもそれが研究の基盤です。しかし、このところ取り組んでいるのは規範の妥当性の由來する根拠の探求や生命倫理の問題で、とりわけ生命倫理については、前任校が医学部（和歌山県立医大）であったこともあって、論文をまとめる機会が重なりました。この三つの研究領域がどうつながるのか、その焦点みたいなところをいま模索しているところです。理論的な裏付けを別として、研究者個人の志向のようなものをいってしまえば、「なぜこうなっているのですか。なぜこの反対ではいけないのですか」という若き日のムーミンパパの問い合わせをひきつけるとでも申しましょうか。哲学・倫理学という固い分野を専攻しながら、日本語らしい日本語（それは何か？）で書けないかということも以前から持ち続けている課題の一つです。

福岡正人 自然環境研究コース助教授



山口大学工学部資源工学科および大学院工学研究科修士課程において、硫化鉱物の热水条件下での溶解度測定と溶存イオン種決定に関する研究、および硫化鉱物の乾式合成と热水合成による相平衡の研究を行ったのち、九州大学大学院理学研究科地質学専攻博士課程において日本のマンガン鉱床に産するマンガン硫化鉱物の記載的・成因的研究を行った。

昭和53年8月、九州大学理学部助手に採用され、以来おもに日本とインドのマンガン鉱床の鉱物学的・鉱床学的研究を行ってきたが、平成5年1月1日付で本学総合科学部助教授として着任。地球内部資源論を専攻する。

担当授業科目は地下資源論、一般地学Ⅰ・Ⅱ、地学実験など。

現住所は東広島市の大広ががら第2宿舎1-504で、家族は妻と娘一人（小学校1年生）。

筒井和義 生体行動科学コース助教授

脳科学への挑戦—総合科学の道—
人間を含めた動物の行動発現の仕組みを生理学的に理解するには脳の働きを知る必要がある。このような観点から脳機能を探ることは、正に「総合科学への道」を歩むことにはほかならない。総合科学部で脳生生理学を研究する教官として採用されたことは、広島生まれの私には、二重の感激である。今後は、本能行動の制御と音声学習を司る神経ペプチドや脳ホルモンを明らかにし、その作用機構を追求したいと考えている。

吳 漢生 数理情報科学コース助教授

昭和57年中国東北大學（旧東北工学院）自動制御工学科卒業。59年同大学大学院工学研究科自動制御工学専攻博士課程（前期）終了、同大学助手。60年研究留学生として日本国広島大学総合科学部。平成元年9月同大学工学研究科情報工学専攻博士課程（後期）終了後、中国東北大學自動制御工学部講師（H 1.11—H 2.9）、オーストラリア New South Wales 大学機械製造学部研究員（H 2.10—H 4.3）、日本学術振興会外国人特別研究員（H 4.3—H 5.3）を経て平成5年4月1日付で本学総合科学部助教授として着任。

専攻は情報制御理論とシステム理論とそれらの応用。
私は、広島大学で留学および研究を行っていた長い間に、本学部先生たちからいろいろなお世話をいただいて、誠に有り難うございます。今後とも変わりませずご厚誼のほど幾重にもお願ひいたします。

岩永 誠 生体行動科学コース助教授

広島大学総合科学部に入学したのが1978年、以来10年間総科で学び、作陽音楽大学に赴任したのが今から5年前のこと、しかし結局総科に舞い戻ってきてしまいました。総科の自由な雰囲気は何物にもかえ難いものがあり、またそうした雰囲気の中で研究できるのは、このうえない喜びです。キャンパスも西条に移転し、整然とした研究棟が立ち並ぶ姿は圧巻です。東千田キャンパスでは考えられなかつた光景です。しかし、卒業生の一人として、あの東千田キャンパスがなつかしく思えます。狹かったけれど、あの混沌とした中の躍動感は、この西条キャンパスでも受け継いでいってもらいたいと願っています。

専攻は行動制御論で、行動療法や音楽療法を中心にその基礎的研究を行っています。

**ピーター・M・スケヤー
外国语コース助教授**

私は、4人兄弟の末っ子として、カリフォルニアのサンフランシスコに生まれ育ちました。カリフォルニア大学デービス校を卒業後、東京の青山学院で英語を教えていました。その後、シアトルのワシントン大学で言語学を専攻し、修士号と博士号を取得しました。大学院時代にESLと言語学のインストラクターをやり、その後、Bureau of Refugee Resettlementでカリキュラムのデベロッパーとトレーナーを務めました。1987年より米国外務省に言語トレーニングのスーパーバイザーとしてワシントンDCに入省し、そして約3年前に外交官として横浜に着任しました。

私は、また米国国務省日本語研修所所長及び韓国語研修所長を務めました。この研修所では、米国をはじめ、カナダ、ニュージーランド、オーストラリアの外交官、またはそれに準じる人たちが日本語を学んでいます。

私は、日本の任期が終わる3ヶ月前に米国国務省を退職し、妻（久江）と8歳になる娘（セーラ）、もうすぐ3歳になる息子（ジョージ）とともに広島に参りました。どうぞよろしくお願ひいたします。

加藤 徹 人間文化コース講師

私は東京オリンピックの直前、昭和38年6月19日に東京で生まれ、千葉県で育ちました。子供のころから中国にはなんとなく、心をひかれていました。今年の3月まで東大の大学院（中文科）で「中国地方劇研究」を専攻しておりましたが、この4月からやっと社会人1年生として働かせていただくことになりました。

いまから2千年前、ある中国の学者は「幼少の頃から1つの専門分野に精進しても、一人前の発言ができるのは白髪頭になってから」と嘆き、当時すでに高度に細分化されていた中国学の現状に対して、「亡羊の嘆」を発しました。学問の細分化がさらに進んだ現代、私は「総合科学部」というユニークな学部のそのまた新しい「人間文化コース」というところで仕事ができることを光栄に思うと同時に、この自由で安定した環境の中でいくらかでも新鮮な仕事ができたらと願っています。

中野博文 地域文化コース講師

学習院大学から参りました中野です。現在私が最も悩んでいるのは言語です。福岡県の久留米で高校まで暮らしたのですが、久留米と広島ではイントネーションが大きく違います。たとえば、「何なにやけんの」という場合、久留米では「の」を短く、また音程を低く下げます。文法体系が近似している分だけ、こうした差異が気になって、ついといふ人と話をしていると「標準語」を使ってしまいます。これは明治維新以来進められてきた東京中心の文化の標準化に自分自身が含まれていると感じる瞬間です。可及的速やかに広島大学の「公用語」を身につけたいと思っています。

古川隆久 地域文化コース講師

4月から本学部の日本研究講座のスタッフに加えていただきました。1962年に東京都杉並区に生まれ、横浜と東京で育ち、東京大学の大学院で日本近代史を学びました。主な関心は第2次世界大戦前後の日本の政治ですが、授業では幅広く日本近現代史を扱っていきたいと思っています。教育経験としては昨年度に青山学院大学で非常勤講師をやっただけなので、まだ若葉マーク付きといったところですが、若さを武器にがんばりたいと思います。

家族は東京の大学院に通う新婚ホヤホヤの妻がいます。趣味はクラシック音楽や映画、ミュージカルの音楽で、聞くだけでなく、ビオラを少しだけ弾きます。野球は横浜ベイスターズのファンです。広島に住むのも初めてなら、専任教員も初めてなので、まだ戸惑っていますが、よろしくお願ひします。

石川雅隆 外国語コース講師

今年度より外国语コースでスペイン語を担当しています。カリフォルニア大学バークレイ校にてスペイン語学および言語学を専攻した後、ハワイ大学にて2年間中級スペイン語を、スペイン語の歴史、スペイン語学を担当しました。専門はスペイン語学、歴史言語学、およびシンタックスです。現在とくに関心を持っているのは、スペイン語の歴史とロマンス語のシンタックスです。

妻と広島市内に住み始めてまだ1年あまりですが、2人で国際文化都市「ヒロシマ」での新生活を新鮮な気持で送っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

鎌田 勇 外国語コース講師

早稲田大学文学研究科で心理学を専攻して修士号を得た後、社会学に専攻を変えて米国ボストン大学大学院に留学し、Ph.D.を取得して帰国して参りました。社会学に於ては、現象学、解釈学、ヴィトゲンシュタイン言語哲学等の哲学理論に基づき、社会学の基礎概念や方法論の再検討、再構築、といった作業をして参りましたが、最近は言語論、コミュニケーション論への関心を強めております。

異文化間コミュニケーション論、及び英語の担当ですが、私の経歴を生かす一つの方向だと思っております。英語を教えた経験はないので、少し不安でしたが、今のところ授業を楽しんでおります。

新しい校舎、広々したキャンパスはとても気分が良く、まだ整備され尽くされてはいませんが、今後の発展を見守る楽しみがあります。また総合科学部の自由な雰囲気も気に入っています。その上、東広島の人々の態度、方言も暖かさを感じさせてくれますし、何より、素晴らしい自然環境は、ここに来たことをとても満足させてくれます。

徐 駿 数理情報科学コース助手

1982年、中国東北工学院（現東北大学）自動制御工学科工業自動化専攻卒業。1985年、同大学大学院自動制御工学科自動制御専攻修士課程修了。同年東北工学院助手。1987年、日本文部省国費留学生として来日。広島大学総合科学部に研究生として入学。1993年2月、広島大学大学院工学研究科情報工学専攻博士課程後期修了。1993年3月1日付で本学総合科学部助手として採用。

研究分野についての簡単な紹介をします。

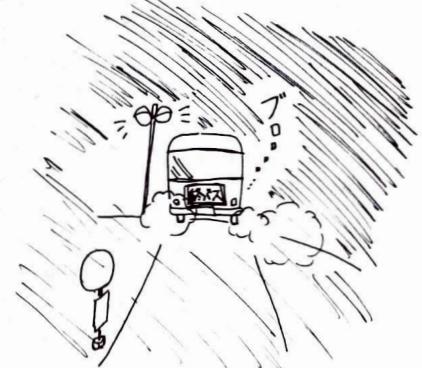
現実的な世界には、いわゆる決定問題あるいは制御問題があります。その中に、多数の決定者が異なる評価関数をもって、一つの決定問題に関係する場合があります。このような利害関係のある決定問題はゲーム問題と呼ばれます。過去数年間、私は上述のような動的ゲーム問題と最適制御問題について研究を行っています。どうぞよろしくお願ひします。

下條冬樹 物質生命科学コース助手

新潟大学理学部物理学科を卒業後、同大学大学院理学研究科修士課程、同自然科学研究科博士課程を修了しで赴任して参りました。

妻と四才になる長女との三人家族です。三人とも新潟で生まれ育ち、これまで、新潟を離れたことがありませんでした。今回、広島に来たことは、私達にとって、視野を広げる良い機会になったと思っています。最近、ようやくこちらの生活に慣れてきましたが、新潟に比べ、気候も温暖で暮らし易いという印象です。大学も、現在住んでいる職員宿舎も、自然が豊富な中にある、このような落ち着いた環境のもとで研究でき幸せいです。

専門は、物性物理学で、これまで、計算機シミュレーションを用いた研究を行ってきました。数理物理に基づく物質科学に興味を持っており、今後は、第一原理からの物性の解明を志したいと考えています。



倉石 晋先生を悼む



故 倉石 晋教授

倉石晋先生は本年2月2日、肺炎による呼吸不全のため広島日赤病院で亡くなられました。倉石先生の死は、そのわずか3週間前、できたばかりの西条キャンパスの研究室に二人で足を運び、研究室の配置や設備について打ち合わせていたのが信じられない様な突然の事でした。先生は帰りの車の中で「風邪をひいたらしく、せきが止まらないのですよ。」と言っておられました。翌週肝臓機能の値の異常で入院されたかと思うと、次の日から高熱が続き肺炎と診断されました。当初何も心配していなかったのですが、薬が効かず酸素吸入のため集中治療室に入れられ1週間後に亡くなられました。

先生は1977年東京大学から広島大学総合科学部に移られ、自然環境研究コースに在籍され、環境生理学を担当されました。又一般教育では細胞生物学、種生物学を担当されました。ご専門の植物ホルモンでは自らその刊行を手がけられた *UP BIOLOGY* に「植物ホルモン」を著し、数年前には改訂版を出される程で、幅広い読者を得ていました。これらの研究に対して1990年日本植物化学調節学会から学会賞を授与されました。

先生は学生時代日本の生態学の草分け的存在である門司先生の研究室をご卒業になった事もあり、植物生理学にとらわれる事なく、その知識と経験をいかして、生態学にも強い関心をもち続けられました。先生の興味はマングローブという一風変わった植物に注がれました。私達が食べる大量のブラックタイガーという海老を養殖するため東南アジアの海岸線のマングローブ林が伐採され、しかも作られた養殖池は数年経つと海老の生育が悪くなるため放置され、著しい環境破壊が進んでいる事に心を痛めておられました。

長い試行錯誤と実験の結果、様々なマングローブ種は伐採後その土壤のpHや塩分濃度が変化すると元のマングローブ種を植林してもうまく育たない事を突き止められました。日本の巨大な胃袋がマングローブ林を食べ尽くしたなら日本の研究でそれを復興回復しようとされていた先生の遺志を今後も受け継いでゆきたいと思います。

(櫻井 直樹：自然環境研究コース教授)

学部記事

□1992年度・卒論テーマ一覧

地域文化コース

- 天井 一矩
石原 瑞恵
井上 智香
宇田 昌代
内田 公彦
大庭 小織
岡本 真宜
河野 善久
片山 一俊
黒田真紀子
鈴木 貴彰
船田真由美
手塚 雄美
豊島 雅子
西浦 光
長谷 川豪
浜岡 圭一
津崎 啓子
飛田 古田
古田 勇人
松田 明子
三條 孝一
村上 嘉章
室室 駿男
森 香里
保田 勝宏
山村 圭司
吉村 真也
雨森 賢一
糸崎 誠二
小牧 俊一
西浦 貴浩
柳井 健二
渡辺 和穂
吉儀 浩二
- 在日韓国婦人3世の女性の生き方と結婚観
アメリカ合衆国における民衆説得の論理－革新主義時代のウッドロウ・ウィルソンのスピーチを例として
アメリカ現地効率－日本人効率と体験した葛藤についての研究
アメリカにおけるピューリニズム
江戸幕府御用商人柳町吉保の昇進に関する網吉との因果関係－
劇曲「欲望」という名の電車』にみられるアメリカ南部文化・社会
タイにおける経済的・地政的の不均等発展
気の思想－人間観を探る－
フィリピン援助とフィリピンの自立－民間投資と円借款・その内容について－
抽象への心性と装飾－カンディンスキ研究－
養生と身体・気・心・導引性・ソナ法の身体観－
中産階級におけるアメリカンホームの移り変わり－郊外住宅の理想と現実－
タイのアグリビジネスの成長と農業の変化
庄野龍三論－作品の構造から－
都市のなかのポケットパーク
サッチャリズムと現代イギリス社会
本願寺教団の飛躍的発展と一向一揆発生にみる連如の役割
乱世の文芸－連歌－
小林秀雄論－歴史、或は一つの美学について－
アメリカにおける大恐慌の克服過程－準備協議会の歴史的意義の一考察
「夏のシンボリズム」－学生コンバの脚から－
連邦砂漠地の開拓区 マレーシア連邦サフラクトーの森林の商業的伐採からダヤクによる保存的利用法を求めて
テレビドラマと日本社会－連続テレビ小説を中心にして－
東洋の理想郷－中国人の描いた異郷・仙郷－
芸能史学の研究－戦後の新作曲目を中心として－
エドワード・ホッパー研究
歓見抄－その異義者をめぐって－
妖魔記－金毛尾の狐の記述を追って－
「王權と宗教」－「永遠なるものの表象」と「差異化の体系」－
レヴィ・ナースの「他性」についての考察
『メグ・アーヴィング』とパリ市民社会
アメリカ合衆国における黒人文化とエスニシティ
シカゴのパロキアル・スクール－その拡張と透過の運動－
現代アメリカにおける父親像－離婚後の子育てを中心として－
キャップ・デヴィット合意体制の成立と中東和平－バレスチナ問題の新たな展開－

社会科学コース

- 朝倉 彩子
池田 恵美
市村 佳子
伊藤 敬子
船垣 豊
大越 勝文
大田 勝之
大森 瑞恵
加藤 恵美
坂本 仁
清水 里佳
白川 博章
鈴木 啓介
関末 健男
惣城 伸恵
東條 浩美
豊福 勇一
中村かおり
新見 亜希
野村 由美
平野 克弥
福田 明之
藤沢 典子
堀之内陽子
松村 裕子
丸山佳奈子
馬鹿 和美
三上 和美
道重 直子
三好 啓子
村上 雅彦
森 早苗
- 東方外交再考－シミット時代を中心に
環境アセスメントに関する考察－計画的アセスメントを中心として－
企業における情報化の現況と人材育成に関する一考察
広島平和市企画建設課による都市計画
過労死と日本の労働環境－豊かな労働者生活実現のために－
日本エレクトロニクス産業における研究開発体制の歴史的形成過程とその特徴－比較検討－
被疑者の人権問題と代用監獄についての考察
わが国における製造物責任の立法論的考察
新連邦主義下におけるアメリカの社会福祉－公的扶助制度を中心に－
「日本ファシズム」の形成－北一輝とその周辺－
都市景観形成に関わる法制度の現状と課題
熱帯雨林の生産経済的研究－マレーシア・サラワク州を中心に－
国民の「休養権」とリゾート
特定街区・総合街造形に関する社会経済的研究
景観行政についての考察－宮島町・大野町を事例として－
岩国基地滑走路申請問題
韓国自動車産業を見るアジアの技術形態
スペース・チャンドラ・ボースの一年－1939年8月5日から1940年7月6日まで－
廃棄物とリサイクル行政に関する一考察
牛肉自由化後の国内生産地－広島県田原地域のケースを中心に－
シンガポールにおける製造業の構造変遷－電子・電機産業を中心に－
日本自動車整備－その発生と展開－
スペイン内戦についての研究
第2次世界大戦とジンナー
日本貿易摩擦－隣国の政治システム・制度の相違を中心に－
岩国基地滑走路申請問題
広島県における牛肉自由化の影響と対策－組織論的考察を中心に－
「育児休業等に関する法律」の成立過程の検討
「多人種・多エスニック社会アメリカ」に関する一考察－アーファーマチブ・アクションを素材として
ノーマライゼーションと統合教育の可能性－知的障害者の社会的不利の克服強調を目指して－
現代日本の国際収支分析－ジャニーズネットワークの検証－
過疎地域の現状とその対策について－島根県宍道市を事例として－



山岡 亮治 ルソーの教育思想—社会の中で「自然人」をつくる—
 山之内聖子 環境と開発—地味サミットからの一考察
 山本真由美 フランス教育における移住統合問題—マグレ系移民2世を中心に—
 山本 容子 現代の貿易構造—ECレベルでの人経済の高まりとその侵食のはざまで—
 山本 理恵 出生率低下の社会的要因とその政策に関する一考察
 渡邊 試 中国の環保企業への輸出を中心とする一考察
 渡邊 陽子 「反古術グループ・FLUXUS」の綜合芸術論—1960年代のカウンター=カルチャーについて—
 上田由紀子 日本の「つけ」の美学について—これまでの調査研究の比較・検討を通して—
 川本 駿也 ドイツの学生とナチズム
 北村 康方 環境アセスメント一例を中心として—
 馬場 淳 ネットとペレストロイカとの比較研究
 福田 一教 協同組合原則の意義に関する一考察
 本城 智子 現代日本における働く父親の役割基準—「父親不在」という現象に関する一考察—
 本間 清文 舞台芸術に関する一考察—「風姿花伝」と「俳優修行」における類似点を出発点として—

外国語コース

穴井 珠恵 メアリー・ボビンズ研究：日常的魔術における現実とファンタジー
 石川 由佳 アメリカ英語の会話の結びに関する研究
 梅沢智代 大石 恵 英仏日における一人称主語の研究
 太田 雪絵 ドイツ語・英語・日本語のドラマに表されるレクエスト—比較分析
 大田由美子 日本人英語学習者の英語によるグループ・ディスカッションに関する分析
 大庭 紀子 在日アメリカ人の日本人観
 柳 敏江 ケイト・ショバート「目覚め」批評史のジェンダーポリティクスについて
 國 美千代 リスニング能力と語の認知との関係
 竹田 亮子 ウィリアム・カラヤン研究—自己同一性の探求—
 古垣内 由里 フラン西語 時の表現
 先行詞・代名詞解析：英語とドイツ語の対照分析
 水戸 邦彦 ディクション・プロセスに関わる諸要因についての研究—特に文法知識・文の特徴・リスニングコンプリヘンションとの関係を中心にして—
 森藤 真代 ヘミングウェイの短編小説における父と子のテーマの新しい読みにむけて
 渡辺いづみ 日本人学生に見られる英語語彙の想起メカニズムについて
 中田 宣子 E.T.A.ホフマン作「ファルーンの船山」に於ける船山のモチーフ

数理情報科学コース

古賀 正 連続調査による学童の体格に関する研究
 小森 正博 血清化学製品から成長の研究
 矢嶋 伸頸 成長パターンの分類の研究
 小西 香香 釣合型一部実施問題計画の研究
 古谷 直樹 2元配置実験の研究
 高野 秀敏 モデラントとの応用
 山本 雅之 クラスタ分析によるリモートセンシングデータの解析
 吉田 武司 ランダムサッターデータ解析におけるバイバンド法とスマージング
 常友 計宏 多様体における微積分
 安納 宗季 微分形式とその応用
 櫻山 茂樹 ストークスの定理
 志佐 淳子 デニーによるカオスの定義再論
 原田とみ The Conley-Moser Conditions の検証
 福岡 紀子 Population dynamics における Prey-switching の役割とカオス解の存在
 松下 純子 デジタルな日記計を作成
 梅田 仁司 常微分方程式の安定性
 岩倉 誠 三次元用いた3次元形状入力のためのインラティブ手法
 桜川 有代 デジタル化されたフォントデータからの文字形状抽出法
 高橋 育恵 画像処理としての動的描画法の特性
 渡辺 一功 クロソイド補助曲線の有効性に関する研究
 岩下 武史 設計支援における指標機構に関する研究
 陽井 克幸 リアルタイムシステムのデータフローによる記述と解析
 木村 仁美 むか世界と不确定要素を持つシステムの安定に関する研究

物質生命科学コース

今井 啓則 Lal.9 Cal.1 Cu2 O6 酸化物の水素吸蔵量
 横崎 成美 Mn2Sb の吸蔵性
 橋 真 ESRによる導電性高分子の物理的研究
 加藤 和志 液体カルコゲナイトの光吸収係数の測定
 平松 雅文 混乱した格子の電子状態の理論
 沢崎 寛則 ランダム系の金属・非金属伝導のシミュレーション
 宮尻 修治 液体金属の構造と有効イオン閉鎖互作用
 高橋 真道 A-B効果におけるS行列理論
 渡部 純司 液化物組成事例の過冷却格子構造に関する研究
 東村 恒一 磁性流体のパターン形成の研究
 大倉 孝規 分子格子内の光起電荷分配機構に関する研究
 大村 尚 チョウ類の活動性物質に関する研究
 浜田 刑美 シンジの成分研究（1）クロロホルムエキスの成分
 久保田健吾 シンジの成分研究（2）ブタノールエキスの成分
 入野 幸 ラット腎臓系の生理活性ペプチド
 伊藤 和也 ラット消化管系の生理活性ペプチド
 岡崎 映子 ベルオキシソームで働く分子シャベルタンパク質の新しい精製法
 門田 卓美 ヒト骨髓細胞白血病細胞HL-60の分化と、ガン遺伝子c-mycの遺伝子増幅
 笹上 隆雄 アフリカツメガエル変態期における遺伝子発現プログラムの再構成について
 原 功 ウナギの腸の海水適応に伴う変化

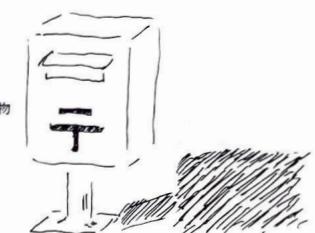
星田 尚司 光合成光化学系II 電子伝達機構に関する研究

自然環境研究コース

山田 孝 盆地における都市気候
 渡辺 誠一 東広島市における都市気候的研究
 近西 剛史 山口県東部熱帯における二酸化炭素の地質構造とマスムーブメント素材の形成過程について
 高迫 清 東広島市立広島大学新キャンパスにおける第四紀系の層位と地下構造に関する研究
 德留 善幸 白山・砂防ダムの堆砂・堆砂の決定機構—琵琶湖の琵琶湖流域の治山ダム群をモデルに—
 矢田 駿大 粒状土の直接せん断試験
 加藤 伸一 アグリショウ類の生存に影響する植物成分に関する研究
 斎藤 隆志 カンブリア中のヒメキフュウ幼虫に対する供食性植物に関する研究
 多田 章 シャンジョウハウの忌避物質に関する研究
 山下 敏広 大気及び天然水中の過酸化水素の定量と発生機構の解明
 藍田 香穂 トヨザクラされた他の種類クロマツ苗木の木材密度と材性に及ぼす影響
 河野 啓弘 暖温带常绿阔叶林における根の呼吸量の推定—土壤呼吸法による推定—
 辻内 真紀 岩月 一裕 暖温带常绿阔叶林における根の呼吸量の推定—提り出し法による推定—
 高橋 真澄 水不足（水ストレス）条件で育てたミカン果実の生理学的研究
 田坂 秀雄 田坂 一雄 一過性子宮外翻症候群とオムギの細胞壁多糖質の分析
 須貝 知雄 石井 正人 コナラ実生の分布模式と成長に及ぼす影響について
 平川 法義 人工構造物が植物種類に及ぼす影響
 前田 伸紀 落葉広葉樹林木における草本植物の生態
 山崎新太郎 アカツツミにみられる広葉樹の更新様式

生物行動科学コース

坂口美亜子 大駒牛の行動パターンに関する研究
 佐々木久美子 ベルオキシソーム形態変化の次世代行動変異の単離と解析
 安田 匡伸 ウナギの心房の行動問題
 早瀬 晃治 学生の大学体育会運動部に対するイメージ構造の実証的研究
 竹中智太郎 学生トラックアリストの競走力の差による活動と意識に関する調査—トライアスロン普及の第一歩として—
 豊永 裕輔 心拍とTapping パフォーマンスやランのスベクトル解析を用いた快適性評価
 道土井浩二 中年男性における呼吸循環機能応答に関する研究
 和田 博之 運動による生理的反応に及ぼす性別の性的な影響に関する研究
 芦田 哲 ランナーにおける血漿CPK活性値の変動とその意味
 吾妻 哲 運動後のクリーリング・ダウンの方法と生理的因子に及ぼす影響に関する基礎的研究
 前原 利彦 運動筋筋収縮からみた筋力トレーニングの影響に関する基礎的研究
 前倉 拓 慢性頭痛者の生理・心理的性状について—物理的ストレッサーに対する反応性
 蒲田 千都 術的発現に関するバーソナリティ・特徴及び社会的要因の検討
 田邊 晶子 生理指標による活動の分類の可能性についての検討
 塚本 裕子 評価場面における隨意性の有無と運動能力量及び想量に及ぼす影響
 岡村 美穂 大学生のストレッサーと影響を与える要因についての検討
 山本ゆかり 青春期における父母親像—娘からみた魅力ある父親像—
 古川 博子 自己定義方略の性差と個人差に関する実験的研究
 片岡 由恵 人間関係の認知次元に関する研究
 久保田いづみ 台風919号によるライフライン災害に対する広島市民の対応
 小島 浩志 地球環境問題に関する意識調査の分析—態度・価値観の側面からのアプローチ
 佐藤 加代 行動・内省・生理学的指標のクロマティアン運動に関する検討研究
 田川 智美 入眠期の心理的体験と脳波についての検討
 舞原 利輔 睡眠・覚醒リズムの位相前進による生理的・主観的变化の経過について
 小林 茂 分別学習と誘発電位に関する基礎的研究



読者からの手紙

—飛翔44号について—

坂田 省吾（生体行動科学コース講師）

「特集」東千田キャンパスを記録する"を読んで。」 東千田の旧キャンパスはこんなにも美しかったのか…。写真をみて最初に持った感想です。実物よりもずっといいものに写っている。今にも崩れそうなプレハブでさえ、造ったばかりのような印象を持つ。生き生きと生活しているエネルギーの輝きが感じられた。写真に記録して保存して欲しいものがそのまま記録されていて、嬉しかった。いい特集だったと思う。貨車のあるキャンパス風景はそうあるものではない。私自身、学生時代と立場を替えて教官になってからも、耐用年数を過ぎたプレハブで生活をしてきた。冬の寒さと夏の暑さ、雨の日には廊下までが濡れてしまう。あの台風19号で飛びそうになったプレハブが、こんなにも輝いていたのかと感じられたのは意外でした。旧自然棟の実験機器で埋まった廊下、タイルの割れかけた教室。西条に移転して、建物は立派になった。西条は田舎だ、自然がいっぱいあるといつても、赤土の露出した西条キャンパスよりは、写真で見る限り、雑草の生い茂った東千田キャンパスの方が、緑に囲まれて生活している印象を受ける。西条にはまだ生活の臭いがないということであろうか。白黒写真は言うに及ばず、カラー写真も光の関係からか、妙に美しい。哀愁にも似て、失われていくものはいつも美しいということであろうか？生きているものの輝きを、西条キャンパスにも持たせなければならないと感じた。

峯松 茂（事務長補佐）

のっけから、執筆者、編集者には失礼な話であるが、広報誌に類するものはいわゆる積ん読者である。改めて飛翔44号を通読し、この頃思っていることを書いてみた。

44号が西条移転を控えた東千田キャンパス最後の発刊のため、「東千田キャンパスを記録する」を特集に掲げており、そのうち興味をもったのが歴代学部長の座談会である。学部創設の経緯・理念、その評価、これから進む方向等を、創設後18年間にわたるその折々の学部をとりまく異なる背景、困難を乗り越えてこられた感概を述懐しておられる。

2年前の設置基準大綱化の結果、大学教育の見直しがいわれ、大学の自由な創意を尊重し、多様で個性ある教育のあり方を模索し、推進、実施することが可能となったが、創設当時、一般教育と専門教育の壁を取り払うことはできないまでも、既に学部理念を一般教育に活かさなければいけないという、大綱化の基本思想にまでふみ込んでいたことに、改めて先見の明があつたと思う。

思い起せば、2年前御供した全国教養部長会議で、大綱化後に向けた一般教育の改革について、他大学が危機感をもって文部省の見解を質していたこと、また、天野前学部長が本学部創設の理念が全国的に浸透せず、その努力が足りなかった趣旨のことを自省を込めて述べられたことが印象にのこり、一般教育を担う部局存在の関わることは、さしあたり、方向付されることに安堵感を持ったものである。

時あたかも、学部開設授業科目の設定に学部をあげて取組まれており、創設時の心血をそいた熱意が蘇生したかの観があるものの、いまだに学部一貫カリキュラムの具体的な形が見てこない。これが、一般教育と専門教育、文科系と理科系、これにコース制（学科？）を包含し、さらに様々な外圧が加わり、これら的一体・融合化が容易でないことは察するが、今後に一歩の不安がのこる。

近い将来、本学部の改革はどのような起伏の道をたどり、那辺に帰着するのであろうか。推進にあたって意を尽した話合いから、望ましい結論に到達することを願うのみである。

終わりに、44号モニターの立場で、特集の主旨から説明付の写真を多く取り入れ、見出し、イラストの工夫により、広報誌にありがちな堅さがなく、読み易さを求める編集方針がうかがわれる。(1993年6月)

永田 智子（地域文化コース3年）

"歓迎・総合科学部移転"の記事に考えさせられた。確かに移転前は行きたくないという気持ちの方が強かつたし、実際に西条に移り住んだ現在も、やはり広島市内に残って西条へ通うのが正解だったのではないかと思うときがある。演習で文献を探してもいちいち広島市内に出なければならない現状。しかし、だからといって、まちづくりに積極的に関わる意志もない。

こんな状態に陥ってしまっているのは、やはり"広島"の存在が大きすぎるからだろう。中四国最大の都市であり、文化施設や娯楽施設もひととおり揃っているし、よそから来た学生をも内包してしまう都市型の人間関係がある。さらに、幸か不幸か、西条は広島市とつかず離れずの場所に位置している。隣接していれば、広島市の活気のあるまちが延長ってきて、西条独自の学生のまちに発展する可能性もあるだろう。また、広島市の影響の及ばぬほど遠ければ、西条は別の意味で独自の発展をすることだろう。しかし、JRで30分かけて広島市内へ出るほうが手っとり早いのが西条というところだ。まちづくりの計画が実現する頃には、



もう卒業してここにはいない。

いいわけばかり並べたが、不満をいいいつも西条に愛着を感じつある人は（自分も含めて）かなり多いと思う。記事にもあったように大学が地域で孤立してはいけない。大学関係者と地域の人々とが分離してはいけない。そのためにも、地元で移転に関してさまざまなことをして下さっている方々の活動をこれからも“飛翔”を取り上げていってほしい。自分も西条の不備な点ばかり挙げるのではなく、もっと積極的な方向で“発展途上都市・西条”をとらえてゆかねばと思った。

田中 伸武（卒業生・中国新聞社）

飛翔44号の特集「東千田キャンパスを記録する」を読んで、にわかに懐かしさが込み上げてきました。あの建物、あの空き地、あの看板…、収められた写真は小さいけれど、そこにはどれにも僕なりの思い出がぎっしり詰まっていて、眺めるほどにため息が出てくるほどです。その中で、「生活編3-2」（第二食堂）に目が止まり、はっとしました。写真説明には「二食は量が多く安いので男子学生の友である…総科が移転したら二食はつぶれるのではないか」との記述。そうか、「総科の友・二食」はどうなるのだろう。小生、実は二食のおばさんとは縁があって、とりわけ思い出深いのですが、卒業以来10余年—、キャンパスからは足が遠のいてしまいました。けれども、ご無沙汰しているにつれて思い出の方は、反芻されて膨れ上がってしまって、あれやこれやがドラマのように浮かんできました—。

覚えているでしょうか、二食の厨房で働くおばさんたちの中で、最も元気で体も頑も大きな「まりちゃん」を。あいさつわやか、返事も元気。いかにも学生の味方、といった印象そのままの「まりちゃん」。しかし、なにあろう、そのまりちゃんこそ「株式会社第二食堂」の経営者の1人でした。昭和43-44の大学紛争直後に親が開いた食堂で働き始め、そのまま20数年。つまり総科誕生の源となった事件から今春、総科が東千田を去るまで、まさに総科の歴史とともに「まりちゃん」はあった—ことになります。まりちゃんは、ここで恋をし、結婚し、子供を作り、そして今なお働いています。総科の歴史はまた、まりちゃんのセイションの歴史でもあります。また、昭和50年代前半の入学の人は覚えているでしょうか。大学会館の近くにあった「ウニタ書店」を。店主は、頭を坊主やりにして一見コワそうな人相のおじさん。しかも置いてあるのはやらわけのわからぬミニコミと左翼系の本ばかり、という非常に不思議な本屋さんを。棚には爆弾の作り方を描いて評判となった「腹臍時計」もありました。この一見ヤクザ風サヨクOBチックのおじさん店主が、まりちゃんの亭主で、そして実は山陰の

旧家の出身ながらヒロシマで「平和運動一派オオカミ」といわれたカトーさんなのでした。カトーさんは、店を畳んだ後、福祉施設に勤めたり、某上場企業の社長運転手になったりしながら、一方では地域のソフトボーラーの世話役をずっと続けています。それからさらに、覚えているでしょうか、あの頃、二食の近辺でいつも独り遊びをしていた小学生の女の子を。「はるみちゃん」という名のその子は、カトーさんとまりちゃんの一人娘でした。はるみちゃんは、二食とプレハブの間で、砂ぼこりにまみれて遊んでいました。働く両親の傍らで、獨り遊びする少女。それはちょうど漫画「じゃりんこチエ」の一場面のようでした。そして、チエの父テツのような自由な生き方を信条とするカトーさんが、カゲキな行動をとると、チエたるはるみちゃんがたしなめる場面もありました。ところが、ここに



「この写真は3月に撮ったまりちゃんとボクです。」

も月日は流れて十数年。そのはるみちゃんが昨年春、上京してファッショモデルになってしまったのです。「これが今の娘だ。見てくれ」—。街でばったり会ったカトーさんが自慢して開いてくれた雑誌のグラビアページに載っているその姿は…、がーん。スラーッと細く、背が高く、さっそうとしたジーンズ姿でにっこりポーズをとっているではありませんか。失礼ながら、あのじゃりんこチエの面影は全く消えてしまっていました。

3月のある日、何年ぶりかで二食を訪問しました。総科が移転してしまった後のガランとしたキャンパスに、しかし二食は、敢然と昔のままの姿で元気にありました。カウンターをのぞくと、そこにも元気さと若さを保ったままのまりちゃんが「ああいらしゃい」と迎えてくれました。千田キャンパスは4月になってから、字盤で建て替えた工事中の広島女子大がそっくり移転し、にぎやかになりました。こうした女子学生の増加もあって二食はもうしばらく営業を続けるそうです。はるみちゃんは、東京から帰ってきて、今は広島で古着フリションの店を出す準備をしています。そして、自由人カトーさんは、夏から中国へ留学が決まったと張り切っています。総科といえば二食、二食といえばカトーさん一家を連想するほくの心象風景は、この数年で大いに変化したといえるような、いや、何も変わっていないような、久々のキャンパス訪問で、またいとおしさが一段とつのってしまいました。

編集後記

■編集長から■

昨年に引き続き、総合科学部報「飛翔」の編集長を務めている。誰か新しい人へバトンタッチと考えていたのだが、昨年から導入した編集方針、編集方法を定着させる必要もあり、「言いたしちゃべ」「やりだしちゃべ」の責任もあり、編集責任を引き受けことにした。

幸い、学生編集委員もパソコン編集等の技術革新に慣れてきたし、例年になく多くの新たな学生編集委員も参加してくれている。あまり読まれない雑誌はあるが、公費により発行しているものであり、出すかぎりはより良いものを、より内容のあるものをという「志」を大切にしたい。

さて、本号では総合科学部における教育システムの問題点を、消費者である学生の意見を中心と特集した。また、移転後の西条新キャンパス、今年から学部単位に変わったオリキャンを小特集とした。飛翔は教職員、学生だけでなく卒業生にも送付している。アメリカの大学同窓会の例を出すまでもなく、卒業生は母校の最も頼りになるサポートーである。卒業生の皆さん、母校への意見や近況などを編集部へお寄せ下さい。（住所は裏表紙に表示）

（松岡 俊二）

■学生編集委員会から■

総合科学部の西条新キャンパス移転に伴い、われわれ「飛翔」学生編集委員会もその活動の場を西条の地に移すことになった。しかし移転完了も束の間、総合科学部も大学設置基準の「大綱化」の影響を受け、「総科の教育をどうするか？」という問題に直面させられていた。このような状況を踏まえて、今回の飛翔では大綱化に伴う総科の改革の問題を特集として取り上げた。

今回は前回までの少人数による活動から一変し、10名を越える充実したメンバーをそろえて西条での活動を開始することができた。毎週月曜日5コマの編集会議も充実したものとなり、編集長も喜んでいた。（みなさんどうぞ、A棟504をのぞいてみて下さい：編集長談）くわえて、今回は写真撮影などの面で編集作業に飛び入り参加してくれた人たち、さらに独自の企画を持っててくれた人たちに感謝したい。

小特集連続では、オリキャンのスタッフの人たちに協力してもらい、大成功に終わったオリキャンの感動を誌上に表せたのではないかと思う。また、交通問題に関しては調べれば調べるほど自動車の恐ろしさを実感させられた。この問題は今後とも考えていきたい。

「総合科学とは何か?」「総合科学部はいかにあるべきか?」という問い合わせは、総科のことを考える人たちの中でも続いているだろう。そして、そのような人たちが集まって議論し合い、自分たちの意見を編集作業を通して学部報というひとつの形に仕上げていく場がある。それが「飛翔」である。われわれはこれからもこの場を維持していきたい。そして、飛翔の活動に共鳴してくれる人たちが、さらにこの場に参加してくれるることを願う。

飛翔では次号でも総合科学部の教育システムの抱える問題点を継続して追っていくつもりである。

学生編集長のひとりごと（おまけ）

「頼りになる後継者ができて余は満足である。善哉、善哉。方法・内容ともに充実継承していきませう」

■編集委員■

*松岡俊二（編集長：社会科学コース助教授）、材木和雄（社会科学コース助教授）、今里智晃（外国語コース助教授）、早瀬光司（自然環境研究コース助教授）

*頓田武男（厚生補導係長）、中村 猛（厚生補導係）

*古田智子（学生編集長：地域文化コース3年）、中島英紀（社会科学コース3年）、大森秀美（自然環境研究コース3年）、八木茂樹（人間文化コース2年）、村田雅洋（社会科学コース2年）、泉糸織（外国语コース2年）、高島裕臣（外国语コース2年）、池野 剛（数理情報科学コース2年）、榎原恵子（自然環境研究コース2年）、岡崎麻祐子（1年）、篠崎陽平（1年）、田中裕子（1年）、村上とよ（1年）

総合科学部

in 西条



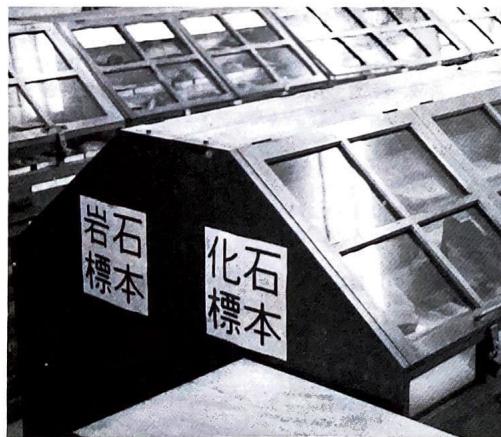
④ 工事現場

総科を造った人間たち。
よいしょ、よいしょ。



クレーン ④

総科を造った機械たち。
高い、高い、高ーい。



④ 地学標本

前号で紹介した「東千田で17年間
狭い廊下に起きたなしひになっていた
地学標本」について安住の地がみ
つかった。おめでとう。しかし、標
本室には普段鍵がかけられているた
め、以前のように気軽にのぞくわけ
にはいかなくなってしまったのが残念だ。



④ 通学中
そこのけそこのけ
バイクが通る。



④ 昼休みあれこれ ④



昼休みの風景。生協が混むせいか、西条では弁当持参的人が増えた。のどかだなあ。

カバンを置いてみなさん食堂へ。
広大は平和だなあ。



西条の緑 ④

芝生の上でなごやかに談笑する人々。何を話しているんだろう。